

中長期目標(学校ビジョン)	夢や希望に向かい、自分らしく輝いてたくましく生きる力を育む。	今年度の重点目標	1 学習指導・授業改善に努める【授業実践の充実】 2 児童生徒の健康と安全を守る【QOLの向上】 3 「チームとりよ」を推進する【連携・協働・業務改善】	《キーワード》 「可能性」
---------------	--------------------------------	----------	--	---------------

評価項目	年 度 当 初				(2)月			
	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策	
1 学習指導・ 授業改善に努める【授業実践の充実】	小学部	○自分らしさを発揮し、願いを抱き意欲的に学ぶ授業づくり	・勉強会を通して、授業づくりや教材等に関する情報交換ができ、各クラスで児童の実態に応じた教材や題材を工夫し、興味関心が高まっている様子が見られているが、児童の内の願いを理解し、引き出す授業づくりがさらに必要である。	・教材や指導方法に関する情報交換が日常的に行われ、児童の実態や興味関心に応じた授業が実践され、児童が安心して自分らしさを発揮する姿が多く見られ、児童の願いに寄り添っている。	・勉強会や掲示板を通して、授業づくりに関する情報共有を継続する。 ・勉強会等の資料をいつでも見られるように保存する。	・感染症予防対策により、直接的に授業を見合う機会は設定できなかったが、グループ研究や子どもを語る会の動画、学習掲示のPC上の共有化等で教材や指導方法に関する情報交換を行った。各学級で児童の願いやニーズについて話し合い、児童の実態や興味関心に応じた授業が実践され、児童が安心して自分らしさを発揮する姿が多く見られるようになっている。	B	・感染症予防対策を徹底した上で日々の日常的に授業を見合う機会を設定し、日常的に学び合える環境作りを行う。 ・PC上の情報の共有化のための保存・活用の声かけ等を行い、有効性を意識できるようにする。
	中学部	○一人一人の課題や教育的ニーズに応じた授業づくり	・教育的ニーズや支援について共通理解を深めることで、生徒が見通しをもち、主体的に取り組める授業づくりに活かすことができるようになってきた。(共通) ・個々の教育的ニーズに応じた実践をしており、生徒も意欲的に授業に取り組んでいる。しかし、生活に根ざした場面で活用できなかったり、諸検査等の結果に現れない現状がある。(単一障がい学級)	・実態把握をもとに根拠ある支援が行われ、生徒は「わかる」「できた」と実感する自己肯定感が向上し、主体的に学習に取り組んでいる。 ・教育的ニーズや支援について共通理解が深まり、それらに応じた的確な目標設定のもとに授業づくりが行われている。	・実態把握をもとに教育的ニーズを明確にし、効果的なICT活用や教材・支援の工夫を行うことで、主体性を促すとともに学習の理解を深める。 ・単元の始めと終わりに学習グループで目標や支援について確認の会を実施する。(重複障がい学級)	・担任だけでなく関わりの多い教師で生徒の様子を日頃から話し合い、実態把握の共通理解を深めることで、主体的に学習に取り組む姿が多く見られるようになってきた。 ・事前に単元の目標や支援を確認して授業に取り組むことはできたが、学習後に反省する機会を持つことは難しかった。	B	・実態把握のもと教育的ニーズを共通理解し、効果的なICT活用や教材・支援、授業展開の工夫など継続して取り組み、主体性を促すとともに学習の理解を深める。 ・学習の事前・事後に授業計画シートを有効に活用して目標や支援の確認・評価をする。
	高等部	○キャリア教育の視点に立った授業づくり	・各担任、教科担当が生徒一人ひとりの自立と社会参加を目指して授業実践を行っている。キャリア教育の視点に立った個々の課題やつきたい力についての共通理解をより深め、それを指導に生かしていく取り組みが必要である。	・キャリア教育の視点をより意識しながら、個々の課題やつきたい力について教員の間でしっかりと共通理解が行われ、ねらいに沿った授業づくりが行われている。 ・未来に向かって小さなチャレンジを積み重ねることで、意欲をもって主体的に学ぶようとする生徒を育てる。	・キャリア教育の視点について学部全体で共通理解する機会をもち、そこを土台として生徒の課題やつきたい力について共有したり、授業の取り組みや生徒の様子について共有するための会を月1回以上もつ。	・キャリア教育の視点をより意識していくために、全体で共通理解をする場を随時設けた。また、単一、重複のそれぞれで月1回以上の会をもち、それを授業実践に活かすように努めた。 ・クラスの実態に応じた様々なチャレンジを重ね、意欲的に学ぶ生徒の姿が見られたが、グループ学習を想定した学習の変更を余儀なくされる状況もあり、安定した学習体制の工夫に苦慮した。	B	・現在行っている会をより有効に活かしていくため、いろいろな視点での開催など、内容の工夫をしていく。 ・単一、重複それぞれの会の内容が全体に行きわたらない面もあった。特に両方に関わっている教員への伝達に留意していく。
	教務部	○とりよのまなびの視点と結びついた諸計画の在り方についての検討	・とりよのまなびの視点と、作成している諸計画とのつながりについての意識や理解が浸透しきっていないことや、作成の努力とそれに対する有用感とが比例していないと感じている教員が多い。 ・新学習指導要領への移行に伴い諸様式の見直し、整備を行っていく必要がある。	・個別的教育支援計画、個別の指導計画の作成にあたり、本校として必要な手順や視点についてまとめている。	・とりよのまなびプロジェクトで、関係分掌と話し合いながら諸計画を作成する意義や有用なものにするために必要な内容などについて確認、整理・研究日や子どもを語る会、学部会などの時間も利用しながら意見交換や理解推進を行う。	・グループ研や学部会などで改善に向けた意見交換を行うことができたが、様式の見直し図るための検討を進める中で、様々な課題が浮き彫りになり、課題を整理することが中心となった。 ・とりよのまなびプロジェクトの開催が難しく、関係機関との連携を図ることができなかった。	C	・とりよのまなびプロジェクトを毎月定期開催とし、学習について必要な視点や内容を企画、検討する。 ・改訂に向けて必要な研修や共通理解の会を計画的に行う。
	研究研修部	○主体的な学びを育む授業づくり	・「とりよの『まなび』」の視点による教育的ニーズの把握と個別の支援が図られてきているが、新学習指導要領を踏まえ、3観点での目標設定と評価について検討していく必要がある。 ・「主体的な学び」の具体的な姿をもとにした授業改善により一層取り組むために、授業展開や指導方法の工夫を図る必要がある。	・新学習指導要領の3観点での目標設定と評価を検討し、一人またはグループで授業の実践に取り入れる機軸が行われている。 ・教科の特性に応じた「見方・考え方」を働かせる授業づくりや、「合わせた指導」において年間指導計画の修正が行われている。	・「とりよの『まなび』」や本校の授業づくりについて共通理解を深めると共に、教科の特性や学習評価について学ぶ機会を設け、具体的な取り組みをグループ研究等で検討する。 ・教科別、学部別研究グループの活動を通して、教科の特性に応じた授業づくりや、合わせた指導の年間指導計画の検討を行う。	・新学習指導要領の3観点での目標設定と評価について、教科グループ毎に授業実践をしたり(単一)、「授業計画シート」の作成に取り組んだり(重複)して、各グループで検討を重ねながら授業づくりを行い実践した。 ・教科の特性に応じた「見方・考え方」を働かせる授業のための教材や支援の工夫について各教科で検討し授業づくりをした。また、「授業計画シート」を作成し実践したことを「合わせた指導」における年間指導計画の修正に活かした。	A	・学習評価について学ぶ機会を継続して設け、「とりよの『まなび』」や本校の授業づくりについて共通理解を深めながら授業実践を行い、支援の確認をしていく。 ・関係する分掌と連携を図りながら、計画的に研修を行ったり、「合わせた指導」における年間指導計画の修正に取り組んだりする。
	自立活動部	○児童生徒の実態に応じた、自立活動の適切な目標設定と指導内容の充実	・昨年度、自立活動目標設定シートを作成し、それを活用して目標設定を行うようにした。これに伴い、目標検討会のやり方も刷新した。活用にあたり、研修会を開いて共通理解を図ったが、活用初年度ということもあり、難しさを感じる職員もいる。 ・お役立ち勉強会(自主勉強会)や自立活動情報誌「MANABI」等で、自立活動の指導に関する情報を定期的に提供している。 ・新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、開催する研修会の精選を行う必要がある。	・自立活動目標設定シートを活用した目標設定について、7割以上の職員が昨年度より理解できた、もしくはスムーズだったと感じている。 ・主催した各種研修会の内容が、教職員にとって日々の授業実践に役立つものであったと感じている。(7割以上)。	・自立活動目標設定シートの活用に関する研修を開催する。また、目標検討会時に自立活動部員が助言をできるようにグループ編成を工夫し、アンケートを実施する。 ・MANABIを年4回以上発行するとともに、お役立ち勉強会等、実践に役立つ研修会を年4回以上実施し、アンケートをとる。	・事例を通しての研修を行い、好評を得た。アンケート実施はできていないが、昨年度より理解を深めた職員が増えたとおり各学部の目標検討会が昨年度よりスムーズに進んでいる。 ・新型コロナウイルスの関係で中止とした研修会もあったが、基礎研修や若手研修、お役立ち勉強会は概ね予定通り実施できた。事後アンケートでも7割以上の職員が役立ったと答えている。また、職員用の自立活動情報誌「MANABI」も予定通り発行することができた。	A	・単一学級の児童生徒の目標設定において、チェックリストを作成したので活用できるようにしていきたい。引き続き、研修会や自立活動部員の目標検討会への参加などを通して、目標設定シートが有効に活用されるよう取り組んでいく。 ・引き続き、職員の専門性向上のために研修会を行っていく。事前アンケートなどをとり、研修内容について精選していく必要がある。
	情報教育部	○ICTを活用した授業実践の推進と充実	・情報モラルの児童生徒への指導に課題がある。 ・学習保障事業(オリヒメ)及びアプリを活用した双方向の情報発信(遠隔授業等)に取り組む必要がある。	・教員が情報モラルについて理解し、情報モラルの指導ができる。 ・オリヒメを含め様々なアプリを活用した双方向の情報発信(遠隔授業等)を行うことができる教員が7割以上となる。	・教職員が児童生徒の実態に応じたICT活用が行えるように、関係機関等と連携した研修会を行う。 ・iPad等を使用した双方向の情報発信、テレビ会議システムの説明会の実施。実践例の紹介を行う。	・関係機関と連携し、情報モラル、遠隔授業に関する全体研修会とミニ研修会を実施し、ICTの利活用が広がっている。 ・遠隔授業等を行うことができる教員を7割以上とした目標は72%(アンケート結果)となんとか達成することができた。しかし、他のアプリも紹介してほしいという要望が多かった。	A	・関係機関と連携を進め、Google suite, google meets 等リモートに関するニーズに応じた研修を複数回実施する。

A:十分達成(90%以上または目標値以上) B:おおよそ達成(70~90%未満または目標値の70~90%未満) C:できつつある(40~70%未満または目標値の40~70%未満) D変化の兆し(20%~40%未満または目標値の20%~40%未満) E:まだ不十分(20%未満または目標値の20%未満)

評価項目	年 度 当 初				(2)月			
	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策	
2 児童生徒の健康と安全を守る 【OOLの向上】	小学部	○健康を守るための学習内容や学習形態の工夫と教室環境づくり	・各クラスで衛生管理に留意し、室温の管理など児童一人一人に応じた対応がなされているが、感染症拡大予防対策のため、児童の健康を守り安心して学校生活を送られるように、学習内容や学習形態を従来とは変更している。	・児童一人一人の障がい特性や体調を踏まえた教室の衛生管理や空調調整がなされている。 ・感染症拡大予防対策に努めながら、学習内容や学習形態を工夫し、現状のなかでの学習保障ができています。	・衛生管理に関する物品の点検や教室環境を整えるうえでのポイントの標準化などに取り組む。 ・感染症拡大予防対策のための情報交換の場を設定し、児童・教職員の不安の軽減をする。	・夏・冬と適温・湿度等個から学級全体への設定・配慮事項を一覧にまとめ、共通理解を図り、児童一人一人の障がい特性や体調を踏まえた教室の衛生管理や空調調整がなされていた。 ・感染症拡大予防対策に努めながら、グループ学習の内容を学級の学習内容に生かしたり、感染拡大状況に合わせた学習形態を工夫し、現状のなかでの学習保障ができていた。	A	・引き続き、個から全体への配慮事項を共通理解しながら、安心・安全・快適な学習環境を整える。 ・引き続き、感染症拡大予防対策に努めながら、グループ学習の内容を学級の学習内容に生かしたり、感染拡大状況に合わせた学習形態を工夫する。
	中学部	○生徒が安心感の中でより主体的に活動できる教室環境の整備	・生徒の心や身体の変化について共通理解の場を設けているが、細かな対応について共通理解が不十分な面がある。(単一障がい学級) ・学部会、子どもを語る会、グループ研究等で情報交換を行い、共通理解を図ってきたが、新しい教職員が加わり、細やかな確認が必要になっている。	・職員同士が生徒の共通理解を深めることで、学校や教室が安心して過ごせる居心地のよい場となり、生徒が主体的に活動している。	・生徒個々の体調や心身の変化等への具体的な配慮ポイントについて記録に残し、学部会、子どもを語る会等で情報交換や共通理解を深める。 ・わかりやすい記録の取り方について、書式等情報交換を行う機会を持つ。教室環境についてはお互いに見合ったり、写真で紹介したりする。	・学部会や単一会、重複会、子どもを語る会で個々の生徒の様子や配慮事項など情報交換を行い共通理解を深めた。 ・教室環境や生徒の状況に即した記録の取り方について、他クラスとの情報交換はできなかったが、学級担任間で意見を出し合いながら整えることで安心して過ごせる環境づくりができた。	A	・学部会や単一会、重複会、子どもを語る会等生徒の日々の様子について情報交換する機会を確保するとともに、学部全体で生徒を育てていく組織的な体制づくりに努める。 ・記録の取り方や教室環境について、学校の一【中学部連絡】を活用して情報交換に努める。
	高等部	○生徒が安心して学べる教育環境づくり	・生徒の特性や体調についての共通理解を行っている。様々な場面を予想し、早めの対応や未然防止について共通理解した上で取り組みをしているが、十分ではない。(単一障がい学級) ・年度や季節の変わり目に体調が崩れがちになったり、成長とともに今までになかった体調の変化がみられたりする(重複障がい学級)	・生徒が心身ともに安心して学校生活を送れるように情報を共有し、対応をとることができる。(単一障がい学級) ・感染の予防に留意しながら、日頃の生徒の様子を丁寧に観察したり情報交換したりすることで、早めに対応することができている。(重複障がい学級)	・より適切な指導ができるように日々の情報交換を密にし、生徒の心身の様子を早めに把握できるようにする。(単一障がい学級) ・生徒の心身の状況を日々の健康観察等で把握し、担任間で情報交換ををしたり養護教諭に相談したりして、心身の健康がより良好に維持できるようにする。(重複障がい学級)	・単一・重複両学級とも日常的に生徒の心身の状況について把握・情報交換し、より安心安全な教育環境を整えることに努めた。 ・単一・重複それぞれの会の内容が全体に行きわたらない面もあった。	B	・引き続き、こまめな情報交換をしながら支援にあたる。 ・学校の1日やホワイトボードなどを利用した、よりよい情報共有の仕方についての工夫を重ねる。特に単一・重複両方に関わる教員への伝達に留意する。
	保健安全部	○児童生徒が安心安全に快適に学校生活を送ることができる環境整備と体制づくり	・安全で健康的な学校生活を送ることができるように、基本的事項や児童生徒への対応についての研修を行っているが、感染症拡大予防対策の為、現状に応じた計画や見直しが必要である。 ・地震、火災時の避難経路や場所、児童生徒の引き渡し等、課題が残っている。防災委員会、総務部と連携を図っていく必要がある。	・個に応じた緊急救急体制が学級・学部・学校で共通理解され、危機管理意識を持ち、環境や体制が整備されている。 ・新連絡通路完成に伴い、災害時の緊急対応について検討し、体制が確立している。	・研修や各種訓練の反省、緊急・防災ウィークでの気づきから、安全面・健康面に留意した対応を行う。 ・昨年度の課題点から救急体制を作成し、防災委員会を開催して体制を決定する。	・全体カンファレンスを通して、教職員全員に児童・生徒の情報共有や対応についてを周知したり、個に応じた救急体制の協議や見直しを随時行ったりした。又、学校保健委員会を书面開催としたことで、全家庭に学校の取り組みを紹介したり、学校医や薬剤師等に保護者や教職員からの質問のアドバイスをいただき、返答を伝えたりすることができた。 ・救急・防災ウィークや各訓練の反省から、「今後のよりよい防災の在り方」や「緊急対応」について検討することができた。具体的な改善策を考え、備蓄品の購入や避難経路については、整いつつある。	B	・校舎増築や来年度予定されている工事に合わせ、状況に応じた救急体制や感染予防対策等、今後の危機管理について検討し、全体への周知徹底を行っていく。 ・「今後の鳥島の防災の在り方」で検討したことを実現へ向けていくために、防災委員会で検討していくことが必要となってくる。

A:十分達成(90%以上または目標値以上) B:おおむね達成(70~90%未満または目標値の70~90%未満) C:できつつある(40~70%未満または目標値の40~70%未満) D変化の兆し(20%~40%未満または目標値の20%~40%未満) E:まだ不十分(20%未満または目標値の20%未満)

		年 度 当 初				(2)月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策	
3 チームとりよう」を推進する【連携・協働・業務改善】	小学部	○保護者や関係機関と連携した指導支援の充実と同僚性の向上	・保護者や関係機関から得た児童の情報や助言が、クラス内では共有され、指導にいかされていたが、学部全体で共有することでより専門性を高めたり、同僚性を向上させたりすることに至っていない。	・保護者・関係機関と児童の情報を共有しながら、研修に取り組み、各自の専門性を高めながら、互いに支えあう教職員集団となっている。	・助言内容等について学部全体に周知したいことについては、回覧やPC上で共通理解が図れるようにする	・感染症予防対策のために保護者・関係機関と連携することによって、校内の支援を充実させるなどして児童の情報を共有しながら、研修に取り組んだ。助言や連携した内容について関係者で共有し指導に生かすことはできたが、学部全体で情報共有したり、専門性を高め合う機会を設定したりできなかった。	B	・子どもを語る会・学習会のテーマ設定の仕方を明確にし、計画的に行っていくようにする。 ・個人情報に留意しながら、回覧・PC上の保存情報共有の仕方を工夫する。 ・グループ学習のあり方、授業を見合う等お互いの授業力を高め合う機会を工夫する。
	中学部	○自己実現に向けた指導・支援を行うための連携の在り方	・自らの進路に対する意識は少しずつ高まってきているが、まだ自分の問題として考えることのできていない生徒もいる。(単一障がい学級) ・学校、保護者、関係機関等との連携強化に努めてきたが、進路に関する情報については十分な情報提供ができていない。	・将来の姿をイメージし、そのためにどんな力が必要かを考えるよう、指導や支援が適切に行われている。 ・生徒一人一人の病気や障がいの状態や特性に応じた適切な支援を行うために、保護者・関係機関との連携を深めている。	・高等部の教育課程や学びの実態を生徒に知らせたり、本校以外の高校や高校卒業後の福祉就労等の実態を伝えたりする学習の場を設定する。(単一障がい学級) ・職場体験、校内作業実習、福祉施設等利用週間に際し、具体的な資料を使って進路情報を提供し、卒業後を見据えた支援を行う。	・職場見学、職場体験、福祉施設・関係機関利用週間が実施できず、進路について考える機会は減ったが、校内作業実習の内容を工夫したり、卒業生の話を聞く機会などを設けたりして、少しずつ自分の将来に対する視野が広がってきた。	B	・職場見学、職場体験、福祉施設・関係機関利用週間ができない時の対策を年度当初に考ておき、計画的に実施する。 ・生徒本人や保護者のニーズを聞き取り、必要な情報提供に努めていく。
	高等部	○確かな進路実現に向けての支援体制づくり	・高等部卒業後の進路として生活介護から一般就労、進学等多様であり、それぞれの進路に応じた指導・支援が必要である。	・職場見学や体験等の経験を生かして、それぞれの進路に応じた指導・支援が適切に行われている。	・より適切な進路指導ができるように、学部会等を利用して進路に関する情報共有の場を年4回以上設ける。 ・本人や保護者の進路に関する希望を元に、具体的な計画やスケジュールを立てて、進路指導主事とも連携しながら、進路実現に向けての指導・支援を進めていく。	・職場見学や体験等の学習を実施することはできなかったが、学部全体や個別などニーズに応じた場面を設定し、進路に関する情報共有の場を4回以上設けることができた。 ・共有した進路情報を活かしながら進路指導主事と連携し、個々のニーズに応じた進路指導を進めていくことができた。	B	・コロナ禍の中での、進路に関する体験的な学習についての具体的な検討をしていく。 ・個々のニーズに応じた情報提供ができるよう、より一層情報収集、共有に努めていく。
	支援部	○地域におけるセンター的機能の充実	・外部からの障がいの状態に応じた様々な支援や就学、進学に関する相談に対して、校内の職員の専門性を活用し、できるだけチームで対応できるようにしている。 ・校外からの教育相談や特別支援教育研修会、交流及び共同学習等、本校のセンター的機能の取り組みについて校内の職員へ周知・理解を進めている。	・エキスパート教員や学部主事等と連携しながら、適切な支援方法の提供や就学相談を行っている。(地域支援) ・本校のセンター的機能について、教職員が周知・理解している。	・エキスパート教員等を中心として地域へのセンター的機能が果たせるよう、特別支援教育研修会の持ち方、内容を工夫する。 ・掲示板や職員連絡等で、本校が行っているセンター的機能の取り組みについて報告する機会を設ける。	・感染症予防に配慮できる形を工夫しながら、地域の小中学校の病弱・肢体不自由に関わる先生方のニーズに合わせた研修会や教育相談を行った。また、エキスパート教員等の協力を得ながら研修会が行えている。 ・学校見学や交流及び共同学習、体験入学等の制約もあり、校内の職員への周知・理解やチームでの対応は十分でない状況であったが、掲示板を活用してセンター的機能の取り組みについて、全職員に情報提供を行った。	B	・感染症の状況にあわせて、できる形を工夫して地域のニーズに応えるよう努める。 ・掲示板等で紹介する機会を設ける。
	文化部	○わくわくフェスタの意義の共通理解と効率的な運営	・学校の一日にわくわくフェスタ欄を設けたことで、情報が共有しやすくなった。 ・わくわくフェスタの捉えが職員に浸透していないことや感じられる。	・全職員がわくわくフェスタ全体の流れや担当する仕事内容を把握しながら、連携して運営することができたと7割以上の人が感じている。	・誰にでもわかるシステムの明確化(見やすいフォルダ) ・わくわくフェスタの意義を早めに提案し、全職員で共通理解する。	・随時、情報発信に努め、情報共有・共通理解を図ることができた。しかし、実際の運営面では、例年とは異なる取り組みをする中で、予想外の事態も生じ、スムーズにいかない場面があった。	B	・今年度と同様の開催形式を想定し、ICT機器の活用について情報教育部に協力を得る。 ・他校での学習発表会等の取り組みも参考にする。
	キャリア教育部	○本校の進路・キャリア教育の取り組みや収集した情報の発信	・本校の進路の流れやキャリア教育・人権教育の基本的な考え方について、教職員に定着していない部分がある。 ・学校説明会、参観日等で卒業後の進路やキャリア教育、人権教育について説明してきたが、十分に伝わっていない面がある。	・進路の流れやキャリア教育・人権教育の基本的な考え方について教職員で共通理解し、実態に応じた目標を意識して指導をしている。	・校内研修(全体、学部等)を2回以上計画し、進路、キャリア、人権教育について教職員で共通理解する。 ・教職員、保護者への情報提供の方法を整理し、必要な情報が伝わるよう工夫する。	・人権教育、キャリア教育について校内研修(全体)を実施し、教職員で共通理解できた。また、各学部でもキャリア教育の視点や進路関係について研修を行い、合わせて2回以上実施した。 ・コロナウイルス感染症対応のため様々な制限下でのキャリア教育参観日となったが、各学部でキャリアの視点を含んだ授業づくりを計画・実施できた。職員、保護者アンケートをもとに振り返りを行った。 ・コロナウイルス感染症予防のため、施設利用体験及び職場体験が実施できなかった。保護者の希望を取り、コロナウイルス感染警報等が出てない時に事業所見学(保護者と進路担当)や進路支援会議を数件行った。	B	・コロナウイルス感染症対応の職場体験・施設利用体験の方法を検討し、実施に向けての準備をすすめる。 ・学部会等でキャリア教育について共通理解したり研修したりする機会をつくり、その時に必要な情報提供をする。 ・支援部と連携して保護者への情報提供を工夫する。
	総務部	○分掌業務の見直し	・再編や削減した業務、未来企画委員会で検討した内容の進捗状況を確認し、年間の教育活動を通して不具合がないか検討し、調整を図ることが必要である。	・年度末には、再編・削減した業務、未来企画委員会部で検討した内容について、不具合の有無が確認され、不具合のある70%以上の項目について分掌間で調整されている。	・再編・削減した業務、未来企画部で検討した内容を総務部内で確認し、職員に周知する。(5・6月) ・7月・11月にアンケートを行い、再編・削減した業務における不具合を確認し、調整する。	・分掌反省アンケートを実施し、各分掌チームにアンケートのまとめを伝えた。昨年度から今年度にかけて行った再編・削減について、不具合があるという回答はなかった。 ・複数の分掌に関係する内容や学校行事の見直しについて、総務部会や未来企画部で検討した。	B	・各分掌で業務の精選について検討しているが、十分ではない。 ・学校行事の見直しと、担任授業担当者が作成する文書の見直しが必要である。

A:十分達成(90%以上または目標値以上) B:おおむね達成(70~90%未満または目標値の70~90%未満) C:できつつある(40~70%未満または目標値の40~70%未満) D変化の兆し(20%~40%未満または目標値の20%~40%未満) E:まだ不十分(20%未満または目標値の20%未満)